

て移動していったことが考えられる。その動きの中でC群に主体が移っていったのであろう。

本遺跡が出現する3世紀中頃は、比田井氏が指摘しているように、「西暦250年前後、古墳時代前期Ⅰ段階からはじまる集団移動の再開」⁸⁾の時期に相当する。また、杯部に対して小さく取りつく脚部をもつ無文の高杯と祭祀用土器である小型器台、小さな杯部とスカート状に開く脚部をもつ小型高杯といった三種の土器が東海西部に系譜をもって波及定着する状況がまさに、市野谷宮尻遺跡の成立に大きく関わっている。

第2節 屋外祭祀と屋内祭祀

本遺跡で検出された遺構のなかで注目されるものに、A群南側の宮尻Ⅱ期の竪穴住居に囲まれたような空間に位置する手捏ね土器を多量に使用した祭祀遺構があげられる。分布図がないため、詳細に検討できないのが残念であるが、古墳時代前期の祭祀は県内でもあまり類例がなく、屋内ではなく屋外となるとさらに少ない。

比較的狭い範囲に、第128・129図に示した55点の手捏ね土器やミニチュア土器が出土している。この状況には、廃棄場所として利用したか集落内の共同的な祭祀行為を示すものの両方が考えられる。前者では、集中範囲を囲むように手捏ね土器やミニチュア土器を伴う竪穴住居が集中し、屋内祭祀を行った後に中央部に廃棄したとする考えができるが、果たして廃棄場所として中央広場を利用するであろうか。むしろ、広場を神聖な領域として捉え、屋内祭祀とともに共同的な祭祀を執り行ったとする後者の考えの方が妥当性があるように思われる。また、集中範囲に掘り込まれた遺構が存在しないため、埋納ではなく、オープンな状態での祭祀行為と考えられる。

一方、屋内祭祀としてとらえられる竪穴住居内出土の手捏ね土器やミニチュア土器は、第134図に示したように、Ⅰ期に2軒、Ⅱ期に12軒、Ⅲ期に10軒、Ⅳ期に1軒みられる。本遺跡の最盛期であるⅡ・Ⅲ期に、集中群単位ではA群に集中する傾向が強い。屋外祭祀の手捏ね土器の年代を比定することは難しいが、比田井氏の「小形壺」の時期編年⁹⁾に当てはめると、Ⅰ段階（新）と考えられ、宮尻遺跡ではⅡ期に相当する。この時期は、集落内の屋内祭祀が活発化する段階で、先述したようにⅡ期の竪穴住居に囲まれたような位置関係からも、共同の神聖な区域と捉えられたのであろう。屋内祭祀とともに集落内構成員の精神的紐帯を強化するような目的で祭祀行為が行われたと考えられる。

屋外祭祀の県内の例としては、中期では石製模造品を含むような祭祀遺構が多くみられるが、前期となるとほとんど類例がない。白浜町小滝涼源寺遺跡では、宮尻遺跡とほぼ同時期と思われる祭祀遺構が調査されている。ただ、この遺跡は全体が祭域の場として規制された大規模な祭祀場であるため、集落内祭祀と思われる本遺跡との直接的な比較は困難である。宮尻遺跡の集落の成立に西方の集団移動が考えられるならば、移住元の祭祀形態を考慮する必要もあろう。

第3節 竪穴住居の形状と属性

本遺跡から検出された竪穴住居は90軒で、平面形はすべて方形を基本とし、隅の丸い平面形は存在しない。方形とした中でも、大型住居を中心に長方形になるタイプが多く、本遺跡の特徴でもある。長軸と短軸の差が0.5m以上となる竪穴住居を長方形とすると、検出された90軒の竪穴住居の内39軒が該当し、その割合は43%となる。手賀沼西側の柏市戸張一番割遺跡でも同様の傾向がみられ、全体規模が明らかな竪穴住居46軒中23軒が該当し、50%が長方形となる。本遺跡での長方形住居は各期にみられ、大型住居はす